

DS社長の過保護な執愛

本郷アキ

Aki Hongo



Eternity
BUNKO

目次

DS社長の過保護な執愛

5

夫婦で、ライバルで、誰よりも好きで

303

書き下ろし番外編

ずっと二人で

323

ドS社長の過保護な執愛

第一章

紗絵は、今年も花見をしないまま桜の季節が終わりそうだな、と物悲しい思いで、ガラスの向こうの街路樹をデスクからぼんやりと眺めていた。

「本田、この図面、全部作り直せ」

突然、上司である榎谷明司の鋭い声がオフィスに響き渡る。

明司は偉そうに椅子にふんぞり返り、腕を組みながら顎をしゃくつた。

「えっ!？」

紗絵は慌てて立ち上がり足を踏み出す。その拍子に、椅子に膝を強くぶつけてしまい、じんと響くような痛みが走った。

「いったあつ!」

思わず足を押さえて蹲った途端、椅子ががたと大きな音を立てる。なにかが背もたれに引っかかったのかもしれない。

「わっ、やば」

紗絵は慌てて椅子を支えてほっと息をつく。

「あゝびっくりした」

すると、即座に「やかましい」と、明司の大きな声があった。そっちの方がよほどやかましいのでは、と心の中でだけ難癖をつけて、立ち上がった。

肩の下まで伸びた茶色の髪が唇にぺたりと貼りつく。それを手櫛で整えて、椅子を元の位置に戻す。

「お前な……もうちょっと落ち着けないのか？ あつちにまで聞こえるだろうが」

明司は応接室にちらりと目を向けてから紗絵を睨んだ。応接室ではクライアントとの打ち合わせが行われている。

「うるさくしてすみません……で、あの、作り直して?」

紗絵は呆れた顔をする明司の前に立ち、前のめりにデスクに手を突いた。

この春で、紗絵が榎谷住宅で働いて丸六年になる。社長である明司とのこういったやりとりは日常茶飯事であった。

「そのままで。間違ってる」

明司はデスクの上に置かれた図面をとんと人差し指で突いた。その仕草にイラッとしたものが込み上げてくる。

「どこですか?」

提出する前に数値は何度も確認したはずだ。間違いないことも確認している。「一箇所な。ここ。お前、コピペしただろ」

彼が指差した先には、ほかの図面からコピーした数値がそのまま残っていた。この案件はそれと使用する断熱材の厚さが違うのに、変更するのを忘れていたらしい。思わず、うわっと声が出そうになるのをなんとかこらえて、頭を下げた。

「ほんとだ！ すみませんっ！」

「チェックお願いしますっって持ってきた時の、あの自信満々な顔はいつたいたんだったんだ」

「何度もチェックしたので、間違いないはずだと思って」

「本田は思い込みが激し過ぎる。間違いないはずだ、って何度目だ？」

「はい……」

「数字だけを見てるからこういう間違いが起きる。このまま出してもクライアントは気づかないだろうが、もしもこれが現場で反映されたらどうなる？ コストは大幅にアップし、さらに要求性能を満たせていないから工事のやり直しだ。どれだけの損失が出るか考えろ。トイレの便器にドアが当たって開きませんが、契約書にサインしたのはそちらですよ？ とでも言うつもりか？」

「申し訳ありませんっ」

そんなこと言われなくてももちろんわかっている。ミスをしたのは自分で、悪いのも自分だ。

明司の言う通り、紗絵の作成した図面では断熱材の厚さが間違っているせいでトイレの面積が変わってしまい、そのまま作るとドアが便器に当たってしまっていた。

もしもミスに気づかないでいたら考えると、顔から血の気が引く思いがする。

「お前のうっかりミスでこんな家を造られたクライアントはたまったもんじゃない。こういう単純なミスほど気づかないものなんだ。慣れてきたからって自分を過信するな。間違いないはずだと思うな。絶対にミスはあると思ってチェックしろ。お前は学生時代にもう少し法感覚を学んでおくべきだったな。ちゃんと卒業したのか？」

やれやれとバカにするように鼻で笑われ、返す言葉もない。

（そこまで言うっ!? 腹立つー!）

紗絵は、口元を引き攣らせながらすすぐと自席に戻った。

紗絵が働く樋谷住宅は、明司の父親が社長を務める樋谷建設の子会社だ。

樋谷建設は高層マンションや大型商業施設などを手がける大手建設会社だが、その子会社である樋谷住宅は、自由設計を売りとして主に個人向けの住宅や中規模のマンション、店舗の設計を手がけている。

オフィス街の一角にそびえ立つ樋谷建設の目と鼻の先にあるビルの一階と二階が事務

所となっており、社員数は二十名ほどと少ない。

樋谷建設は大手だが、子会社である樋谷住宅は設立してまだ六年の若い会社だ。一級建築士で、さらに有名な建築家でもある明司のネームバリューのおかげで客は引きも切らないが、実績はまだ十分とは言えないだろう。

紗絵は大学卒業後、樋谷建設に就職し、現在は樋谷住宅に向向という形で働いている。設計士として明司のサポートをしているが、クライアントの資金計画の相談に乗るのはもちろん、現地調査をしたり、建築確認申請のために役所を訪れたり、時には土地探しも行う。設計士という名のなんでも屋で、日々、明司にこき使われていた。

動き回る日も多く仕事は膨大で、疲れて食事もとらずに寝てしまうことも多々あり、太る暇もないくらい忙しい。

とはいえ、社長である明司は紗絵以上に忙しい。設計担当としてクライアントとの打ち合わせにも参加するし、図面の最終チェックは必ず明司が行っている。

（初めて会った時は、あの樋谷明司と仕事ができるって浮かれてたし、そのイケメンっぷりに見蕩れちゃったけど、翌日には後悔することになるって、あの頃の私に教えてあげたい）

紗絵は自分への情けなさに対するため息を呑み込んで、デスクにいる明司に視線を向けた。

年齢は、二十八歳の紗絵よりも三つ上の三十一歳。誕生日は一月。身長は百八十。家族構成は両親と明司の三人。樋谷建設社長の息子というハイスペックなエリートである。さらに言えば、見た目も抜群に良かった。

真っ直ぐで豊かな黒髪から覗く男らしく太い眉に、鋭く細められた目。どこか日本人離れした彫りの深い顔立ちは、見るものをハッとさせるほど整っている。

手足の長さ、バランスのいい体軀、凛々しい立ち姿を含めて、悔しいことに見た目には欠点と言える部分が一つもない。

気品のある立ち居振る舞いや、彼の立場を考えても、女性から引く手数多であることは間違いない。

（それなのに性格がこんななんて、残念過ぎる）

大学時代から明司のファンだった紗絵の頭には、彼の詳細なプロフィールがインプットされている。

性格がどうだろうと、彼の建築家としての腕は最高だ。しかし、もう少し優しい性格ならばと考えてしまうのは致し方ないことだろう。

（建築家としてたまにテレビに出てるから、社長目当ての冷やかしか客がけっこ来るし、モテないわけがないんだよね。でも、恋人にも『君は情緒というものをもう少し学んでおくべきだったな。幼稚園は卒園したのか？』とか言ってる。どれだけイケメンでも、

社長とプライベートでまで付き合うなんて私は絶対やだな

紗絵は自分の想像で噴きだしそうになるのをなんとかこらえ、隠すように口元に手を当てた。こんなところを見られたら、また嫌味の百や二百が飛んでくる。

（ま、社長に恋人がいてもいなくても、私には関係ないんだけどね）

ただ、これまで幾人の女性を虜（とりこ）にしてきたのだろうと考えると、あまりお近づきにはなりたくない。明司ほどの男が自分を恋愛対象とするわけがないとわかっていても、恋愛経験が少ないなりに自分の中にある警戒心が、この男に近づいたら危ないぞと信号を発している気がするのだ。

（私に恋愛する暇がないのも、社長のせいだけじゃ！）

明司に近づく予定もないし、厳し過ぎるこの上司に恋愛感情を抱く予定もないが、なんだか悔しくはある。いろいろなところでモテモテの明司と違って、紗絵には出会いも出会いを作る時間もないのが現状だ。

（でも、『ずっと住み続けられる家』は、本当に……本当に素敵だったのに！ あれを造ったのがこの鬼上司だなんて！）

紗絵は大学時代、建築学科に在籍していた。

そしていつかは一級建築士になる夢を抱いていたのだが、明司との出会いで自分がいかに凡人かを思い知ることとなったのだ。

それは、紗絵が建築デザインの国際コンペに挑戦した時のこと。

建築部門のテーマはサステイナビリティ。時代に合ったテーマだと意気込み、会心の作品で勝負に出たつもりだった。

ここで賞を取ったとしても華々しく建築家デビューなんてできる業界ではないけれど、就職に有利になるだろうし箔（はく）がつくと思っていた。

けれど結果は惨敗。佳作にさえかすりもしなかった。

最優秀作品賞は、紗絵と同じ太学生の『ずっと住み続けられる家』という模型だった。なんの捻（ひね）もない普通のタイトルだな、と鼻で笑ったのは、粉々になった自分の矜持（きようじ）をなんとか保つためだ。

国際コンペとはいえ、応募は学生が中心。海外の受賞作品はインターネットで閲覧が可能で、国内の受賞者は小さな会場で授賞式と展示が行われた。

どんな作品が最優秀作品賞に選ばれたのかと会場に足を運んだ時、一目でその作品に心を驚（おどろ）かされた。

どれだけ自分が手を伸ばしても届かない才能があると思ひ知った。悔しかった。どうして自分が選ばれなかったのかわかってしまったから。嫉妬の感情が芽生えたけれど、それ以上に榎谷明司という男の才能に惚れて、憧れてしまった。

友人や先輩、講師にも褒められうぬぼれていた紗絵の作品は、賞を取るためのもの

だった。テーマに則った優れたデザインの模型ではあっても、それだけだった。そこに誰が住んでどういう生活を送るかなんて、まったく頭になかったのだ。

でも彼の作品は違った。きちんとそこに人が存在し、まるで生活をしているみたいだった。

全身に鳥肌が立つような感動を覚えて、紗絵はしばらくその場から動くことができなかった。

実際に彼の造った家を見たいと思ったし、その家に住みたいと思った。だから彼を追いかけて、槌谷建設を就職先に選んだのだ。

明司はその後、二十代の若さで一級建築士の資格を得て、とある美術館の設計を担当した。

それが瞬く間に評価され、最年少で建築を通じて環境に貢献した人に与えられる権威ある建築賞を受賞するに至った。

建築家、槌谷明司の名前はこの業界にいれば必ず一度は耳にする。初めて本人に会えた時、紗絵がどれだけ興奮し嬉しかったか。もちろん今もその気持ちに変わりはないし、彼への尊敬の念も失せていない。だが――

（社長を追いかけてきたことは後悔してない……してないけど、チクチク、チクチク重箱の隅を突いて楽しむようなドＳだとは思わなかった！ いや、ミスした私が悪いって

わかってるよ！ 正論だともわかってるけど！ 言い方ってあるでしょ！）

デスクの前で拳を握りしめていると、背後から紙の束をどさりと手渡された。

「ついでにこっちの別件も修正。クライアントは建築知識に関して素人だと念頭に置いておけと言っただろう。なんでもかんでも要望に応えようとしてどうする。無茶を聞いて困るのはお前じゃない。これから先、その家に住む人だ」

「はい……」

デスクの上には、修正するための図面が束となって置かれていた。パソコンの画面が半分ほど隠れてしまっている。自分の失敗のせいで明司の仕事まで増やしていると思うと、よけいに悔しい。

「過去事例集に目を通したら、これがあり得ない図面だってわかるはずだ。ってことでやり直し、全部、今すぐ」

紗絵は肩を落としながらデスクの上にある紙の束を自分の方へそっと引き寄せ、がっかりと項垂れた。胸の内で盛大に彼を罵倒し誤魔化しているが、本当は誰より不甲斐ない自分に腹が立っている。紗絵は滲みそうになる涙をこらえ拳を握りしめた。

憧れていた槌谷明司はたしかに才能の塊だった。尊敬する人の仕事を間近で見られる。一緒に仕事ができるなんて夢のようだと入社当時は喜んだ。

ただ、あの頃の紗絵は知らなかった。明司がこんなドＳ鬼上司だったなんて。

仕事が厳し過ぎて本気泣きしそうになったことも、高く積み上がっていく終わりの見えない仕事に心が折れそうになったことも数知れず。
 (まあ、一番仕事を抱えて最高の結果を出す人だから、みんなついていくんだけどさ。それでも悔しいっ！ いつか見返してやるんだからっ！)

紗絵はふんつと鼻を鳴らす。

「聞いているのか？」

さらに鋭くなった目で睨まれ、口元を引き締めた。

「はい、すぐに直します！」

「反応が遅い」

「次から次へと言われるので、頭がパンクして、社長の言葉を理解するのに時間がかかるんです」

紗絵は唇を失らせて、ふいっと目を逸らした。

失敗が多いのはわかっているし、反省もしている。でも今まで、二度注意されるようなミスはしていない。

それでも口が達者な明司に矢継ぎ早に責められるとダメージは大きい。ぐうの音も出ないほどの正論だからよいに。

(本人は責めているつもりはないんだろうし、私の言い分だって聞いてくれる。被害妄

想だってわかっているけど、なんかもう悔しいし悲しい……)

懂れていた上司が厳しいとわかってても、がっかりはしなかった。むしろ、彼の仕事に対する姿勢をますます尊敬したし、一緒に働けて良かったと思っている。

(でも、もう少し優しくしなければなあ。この性格がさあ)

明司はDS鬼上司だが、誰にでも嫌味を連発しているわけではない。

負けず嫌いな性格のせいで、紗絵がぼんぼん言い返すからだ。それをわかっているが彼が紗絵をいじってくるため、なおさらこちらもヒートアップしてしまう。

「パンクするほど頭使つてないだろうが！ それに、性格の悪さでお前に迷惑はかけてない。人の性格をとにかく言う前に、その迂闊さをクライアアントの前で披露しないように口を縫いつけておけ！」

「え……声に出てました？」

紗絵はやばいと口に手を当てた。赤くなったり青くなったりしながら、ちらちらと明司を見つめる。

「お前な……そういうところだぞ。声に出てなくても丸わかりなんだよ！」

明司は心底疲れた表情で深いため息を漏らした。いい加減にしてくれと言いたげだ。

「あ、良かった」

「良くない！ その喜怒哀楽でころころ変わる顔もなんとかしとけ！ 怒られて不服で

すつて顔、絶対クライアントの前でするなよ？ クレームを入れてくるようなクライアントに当たって問題になったら、お前の評価にだって関わってくるんだからな？」
 「してませんし、お客様からクレームなんて入ったことありませんから！」
 「俺はこれからの話をしてるんだ。はあ、もういい。お前と話していると疲れる。さっさとその図面を作り直して再提出！ 急げよ？ 今日中だからな？」

「はい！」

「返事だけは素直だな」

やれやれと呆れたように肩を竦めながらデスクに戻っていく明司を横目に、早速修正に取りかかった。

付箋を一枚ずつ確認すると、自分のうっかりさに泣きたくなる。

(チェックしたのに、なんで見つけられなかったかなあ……私のバカ)

断熱材の厚さを数センチ間違えるだけで、今の住まいから持ち出す予定の家具が入らないという可能性だってある。それ以前にミスがわかった段階で基礎工事からやり直しになるし、信用をなくすだろう。

ほかにも所々に付箋が貼りつけてあり、その細かさにうんざりするよりも、的確な指示を出す彼にやはり傾倒してしまふ。

今の明司と同じ歳になっても、同じように仕事ができるとは思えない。

(私も、いつか……一級建築士になれるかな)

明司を見ていると自信がなくなっていくばかりだ。それでも負けたくないと思う。明司より時間がかかったとしても、建築家の夢を諦めたくはない。

紗絵がすべての図面を修正し終えてOKが出た時には、二十二時を過ぎていた。ほとんどの同僚はすでに退社していて、残っているのは自分と明司だけだった。

「お先に失礼します」

「ああ、お疲れさん」

明司に声をかけて会社を出ると、冷たい風に身を震わせる。三月の終わりとはいえまだ肌寒かった。紗絵は薄手のコートの前をかき合わせながら駅へ向かう。

紗絵が住んでいるのは会社から地下鉄で三十分、さらに徒歩で十分ほどの場所にあるワンルームマンションだ。

駅周辺は繁華街や商店街で朝から夜まで賑わい、コンサートホールや劇場、ショッピングモールといった大型施設もある。

さらにJR線や、地下鉄でどこへ行くにも困らないとくれば、築年数四十年の物件ながら多少家賃が高いのも仕方がない。

いつものようにアーケードのある商店街を歩く。店はほとんど閉まっているが、夜でも明るい商店街を通って帰るサラリーマンは多かった。商店街を抜け、オフィスビルが

建ち並ぶエリアを通り過ぎると、五階建てのマンションが見えてくる。

（今日はかなり遅くなっちゃったな。でも、ようやく今週も終わった）

紗絵はスマートフォンの時刻を見てため息をついた。連日の残業に身体は疲れ果て、足下が覚束ない。明日が土曜日で仕事休みなのをがせてももの救いである。

マンションのポストからは、チラシやなにかが溢れていた。

そういえば前にポストを開けたのはいつだったか、と首を捻りながら、紗絵は持っていたエコバッグの中に紙の束を適当に入れていく。

（なんかいろいろ入ってるけど、見るのは明日でいいや……今日はもう寝よう）

紗絵は重い身体を引きずりながらマンションの階段を上がり、部屋に辿り着く。

玄関のドアを開けて靴を脱ぎ捨てたところで、ごろりとフローリングに寝転がった。ベッドがすぐそこにあるのに、眠くて眠くて仕方がない。

意識がずっと遠ざかっていき目を瞑るや否や、ほとんど気絶するように寝入ってしまった。

「ふえつくしゅんっ」

自分のくしゃみに驚いて目を覚ますと、フローリングで寝ていたためか、肩や背中がじんじんと痛んだ。

「うわ、また床で寝てたよ……いたたた……」

紗絵は、凝り固まった身体をのろのろと起こし、コートをソファに投げた。バッグを床に置くと、そのままバスルームへ直行する。

半分目を瞑りながら、シャンプーを手に取り髪を泡立てるが、なぜかいつもと匂いが違う気がする。

「なにこれ？ ボディソープ？ まあいいや」

自分が頭につけたのはシャンプーではなかったようだ。

シャワーの湯を頭からかけ、泡を洗い流す。汚れは落ちているだろうから、そのままトリートメントをつけた。

実家にいた頃、母にも兄にも言われたが、紗絵はうつかりやらかすことが本当に多い。疲れているとそれがよけいにひどくなってしまうらしい。一人暮らしを家族全員に止められたくらいだ。

シャンプーとトリートメントを間違えるのもしょっちゅうで、洗い直すことも珍しくなかった。

仕事に必死になればなるほど私生活がだめになる。それを明司が知ったら、きつと今まで以上に呆れられるだろう。彼に追いつくなんて口で言うのは簡単だが、実際にはどれだけ必死に走っても追いつけないくらいの距離がある。ただ、そうとわかっていても諦めたくないだけだ。

「疲れた」

髪を適当に乾かし、おぎなりに顔の保湿を済ませて、ベッドに飛び込む。寒さに全身を震わせながら毛布にくるまった瞬間、紗絵はすっと眠りに落ちた。

室内の明るさで目を覚まし、ほんやりとしたまま時計を見る。

短針は四を指していた。一週間分、泥のように眠ったからか、かなりすっきりしているが、深夜に寝たのに四時間ほど起きられるなんて非常に珍しい。

「あれ？もしかして朝じゃない？」

朝にしてはやけに明るい室内に困惑し、スマートフォンを確認した。時刻は十六時とある。

「うそー寝過ぎ……私、何時間寝てたの」

土曜日が半分以上過ぎてしまっているではないか。

身体がギシギシいうわけだ。紗絵は頭や腕をぐるぐる回しながらベッドを下りて、洗面所へ向かった。

スタイリングをせずに寝てしまったが、髪は多少寝乱れているだけだ。癖のつきにくいストレートの髪は楽でいい。

軽く髪を梳かして、洗顔する。しっかりと肌をケアしながら一週間分の疲れを落とし

ていると、お腹からきゆるきゆると音が鳴った。

(……うちになんか食べるものあったっけ？)

コンビニで購入した生野菜と、冷凍したご飯にレトルトカレー。それらを皿に盛りつけ、小さなローテーブルに運んだ。

「いただきます」

料理は好きでも嫌いでもなかったが、ここ最近ともに料理ができていないのは仕事^がが忙し過ぎるせいだ。せめて栄養バランスのいい食事とを考えてはいても、手軽さには^{あが}抗えない。しかし、洗わずに食べられる生野菜にも飽きてきた。

(ミスさえしなければ、昨日はもう少し早く帰れたはずなのに)

とにかくケアレスミスをしたくないようにしよう。

紗絵は決意を新たにし、食事を進める。住宅の設計は正解のない問題も多く、あとはとにかく経験を積むしかなかった。

「あ、そうだ」

食事を済ませて食器を洗い終えたところで、昨夜、エコバッグの中に大量のチラシを突っ込んだことを思い出した。ほとんど目を通す必要のないチラシばかりだと思うが、そのまま捨てるわけにもいかない。

一枚ずつ見ていくと、同じ手紙がたくさん入っていることに気づく。

「あれ、これって……」

手紙はこのマンションを管理している不動産会社からで、一週間おきに何通も来ていた。内容はほとんど同じで、四月には建物を取り壊す工事に入るため、すぐに退去を求めるというもの。

そういえば、一年以上前、マンションの入り口に貼ってあったじゃないか。

「そうだ、ここ建て替えて取り壊すんだった。うわっ、うそ、四月ってあと一週間しかないじゃん！」

知らなかった、じゃ済まされない。知っていたのだ。建物の老朽化で外壁の一部が剥がれ落ちてきて、廊下の柱にヒビが見つかったため建て替え工事を行うと。

けれど、あと一年もあるしと放置していたのは自分だ。己の迂闊さをこんな時に呪いたくなるなんて。

（だからここ最近、登録してない番号から何件も電話があつたんだ……たぶん、管理会社だよ……なんか引越していく住人が多いと思ってたんだよ！）

連絡がつかない、手紙の返信もないでは、管理会社も困っただろう。

仕事が忙しかったし、知らない番号だったから出なかった、なんて言い訳だ。

あの鬼上司ならば残念そうな目をしながら言うだろう。『お前、プライベートでもうっかりし過ぎじゃないか？』と。

動揺のせいで、つい明司のドSっぷりを思い出してしまったが、ひとまず冷静になってこれからのことを考えなければ。

（明日の休みで部屋を決めるとか無理だし。そうだ、部屋が決まるまでお兄ちゃんのとこに避難させてもらおう。あとは引越しの手続きをしなきゃ。お金なんて使う暇もないから、贅沢に梱包は全部お任せにするとして。うん、よし、いける気がしてきた）

兄の誠は、紗絵の五つ上の三十三歳だ。実家を出て一人暮らしをしているマンションはファミリータイプのため、紗絵が居候しても広さに問題はない。

それに出張が多く、一年の半分ほどは部屋を空けているため、たまに換気と掃除をしてくれと頼まれるから、合い鍵を預かっている。だめとは言われないはずだ。

「お兄ちゃん、日本にいるかな」

誠に電話を入れると、すぐに電話は繋がった。

「あ、お兄ちゃん？ 私」

『なに？』

「ちょっと困ったことになっちゃって。すぐに今のマンションを出ていかなきゃならならいんだけど、引越し先が決まるまで、お兄ちゃんのとこに居候させてくれない？」
事情を説明すると、電話の向こうから深いため息が聞こえてきた。誠は兄として妹のうっかりミスを何度も見てきているため、怒るのも疲れるというところだろう。

『わかった。俺、一ヶ月ほどいないから、空いた部屋を使っている。その代わり俺が帰ったあとの掃除もゴミ捨ても全部お前な？　あと、さっさと引っ越し先を決めて出ていくこと。邪魔だから』

「はい、すみません」

明司に返事をするように小さくなって答えると、兄にふんと鼻で笑われた。

『珍しく殊勝だな』

「昨日上司からも迂闊だって怒られたから、ちょっと反省してるところ」

妹の仕事にまったく興味がなかったのか『へえ』とだけ返され、電話を切られたのだった。

第二章

次の土曜日。引っ越し業者に来てもらい、荷物をすべて運び出した。

すぐに使うものや貴重品は手荷物として運ぶため、けっこう重い。

紗絵は最後に退去の手続きを取り、兄のマンションへ急いだ。

兄が住む部屋は品川区内に建つ二十階建ての分譲マンションだ。

築年数は新しく、駅からもそれなりに近い。住人はファミリー層が多いらしい。オートロックにコンシェルジュサービス、プール、ジム完備とあり、何期かに分けての予約販売で全戸数完売したと聞いた。

エリート商社マンの兄は、恋人と結婚したあと、ここで生活ができるようにとマンションを買ったようだ。しかし、出張ばかりですれ違うことも多く、なかなかプロポーズに踏み切れないらしい。

鍵を開けて待つっていると、三十分も経たずに引っ越し業者がやって来る。

出張でない兄が紗絵のために空き部屋を掃除していてくれるはずもなく、業者がベッドを運び込む前に急いで部屋の掃除をした。

段ボールが部屋の端に積まれていくのを見ながら、肩を落とす。片付けることを考えるだけで頭が痛くなりそうだ。

（これ、一日くらい有給使っても良かったんじゃない？）

荷造りのほとんどを業者任せにしたとはいえ、使わない家具を一時的に預けるための倉庫の手配や、電気、ガス、水道への連絡。やることは山ほどあったのだ。

とりあえず寝られるようになったところで力尽き、紗絵は綺麗になったフローリングの上でごろりと大の字に寝転がる。

「あああ、もう、お腹空いたー！」

午前中からばたばたと動き、時刻はすでに十五時を過ぎている。紗絵は朝からなにも食べていなかった。冷蔵庫の整理をしたあと、朝食を買っておくのを忘れたのだ。

叫んだところで誰かが用意してくれるはずもない。段ボールの片付けはまだ終わっていないが、休憩を兼ねて近所を歩いてみようと思いい立ち、身体を起こした。

ジーンズとTシャツの上からパーカーを羽織り、バッグと鍵を持って部屋を出ると、隣の角部屋のドアが開き男性が出てくる。

「こんにちは」

これからしばらくはこの部屋に住むのだ。挨拶^{あいさつ}をしておいた方がいいだろうと声をかけた。

しかし男性がこちらを向いた瞬間、紗絵は頭がバグッたような、意識が遠くなっているような不思議な感覚に陥^{おちい}る。どうやら現実逃避をしていたらしい。

「な、なんで……こんなところに」

「それはこっちのセリフだ」

隣の部屋から出てきた明司は、驚いているというより不機嫌そうな顔で紗絵を睨^ねめつけていた。

そういえばこのマンションは榎谷建設が担当していたんだった、と思い出すと同時に、隣人が上司という絶望感に襲われる。

（もしかしたら、友だちが住んで遊びにきただけかも）

けれどその希望は、すぐさま打ち砕かれる。

「社長は、ここにお住まいに？」

「そうだが」

一縷^{いちる}の望みにかけて尋ねるが、呆気なく肯定されてしまった。

紗絵はあからさまにがつくりと肩を落とす。

「お前は？」

「あの、今日引越してきました」

明司はスーッとそ着ていないが、ワイシャツに緩めのパンツスタイルで、埃まみれ^{ほこり}のラフ過ぎる自分の格好とは大違いだ。

「隣の住人、引越したのか」

明司はそう言いながら眉を上げた。

「じゃなくて、一緒に暮らすことに」

「そうか。会社への住所変更手続きを、うっかり忘れるなよ」

兄と、と言う前に話を遮られて、彼は紗絵を置いてエレベーターホールへ向かってしまう。

「さすがに忘れませんよ」

明司の背中を追いかけているが、返事はなかった。
エレベーターを待つ間も、微妙な沈黙が落ちる。仕事で会話はするが、プライベートの会話などこの六年間に一度だってしていない。

(別に一緒に来ることもなかったんじゃない)
今さら気づいても遅かった。

さすがに会社から離れた場所で怒られるとは思わないが、明司となると、またなにか小言を言われるのではと身構えてしまう。

(忘れ物したって言って、部屋に戻れば良かった)

到着したエレベーターに乗り込み、紗絵がロビー階のボタンを押す。

「社長は、お買い物ですか？」

さすがにエレベーター内で「今日はいい天気ですね」という会話もないだろうと、無難な話題を口にする、明司からは「ああ」とだけ返事があった。

(続かない……続かないよ！)

間が持たずに紗絵がエレベーターの階数表示にばかり目を向けていると、同じように上を見ていた明司が口を開いた。

「片付け大変だろ？ 休みを取らなくて良かったのか？」

「え、取らせてくれたんですか？」

テンポ良くそう聞き返してしまったのは、毎日、打ち合わせやら役所への用事やらが詰まっている状況で休みの申請などできるはずがない、という思いからだ。

「当たり前だ。有給休暇を取得する権利があるんだから使えばいい」

「え、どの口が」

取得する権利があったとしても休める状況ではなかったと、誰より知っているはずなのに。当然のように言われると、苛立ちのあまり、つい口に出してしまう。

怒られるかと思ったのに、明司はなにも言わなかった。

しばらくして突然、隣から小さな笑い声が聞こえてくる。空耳かと首を傾げたところ
でエレベーターが一階に到着した。

「……じゃ、私はこれで失礼します！」

紗絵は、脱兎のごとくエレベーターを飛び出し、ロビーを走った。

「おいっ」

背後から声をかけられても知らないふりをする。

エントランスに出ると、マンションに入ってくる子ども連れの女性とすれ違った。女性
は小綺麗なワンピースに身を包み、子どもと手を繋いでいる。

一方紗絵は、パーカー、埃にまみれたTシャツとジーンズ、薄汚れたスニーカーだ。
もちろん、いつもこうではないし、引越作業のための格好ではあるが、なんとなく

ロビーに立つコンシエルジュの視線も不審者を見るような目だった気がした。

（これ……明らかに浮いてるって。着替えてくれれば良かった）

この格好で明司の隣に立っていたと考えると、よけいに恥ずかしくなる。

（ほんと、こういうところがだめなんだ）

きつと明司にも呆れられたことだろう。

（別に、社長にどう思われたっていいんだけど。そうなんだけど！）

美形の隣に立つには、この格好では戦闘力が足りなすぎるのだ。逃げてきて良かった、と胸を撫で下ろしながら、賑わった方へ歩いていく。

この辺りは駅からそれなりに近く利便性もいい。

駅に直結した商業ビルにはスーパーはもちろん、若者向けのファッションブランドも多数入っており、買い物にも困らない。

兄は三十五年ローンだと言っていたが、相当の収入がなければローンの審査は通らないはずだ。

（社長の部屋は角部屋だし、たぶんお兄ちゃんの部屋より広いはず……一人暮らしなのかな？）

もしかしたら結婚の予定でもあるのだろうか。遊び慣れていそうな印象はあるが、明司の浮いた話はまったく聞かない。ただ、恋人がいらないとも思えない。

明司の恋人になる女性はどういう人なのだろう。そんなことを考えていると、私なんて恋人どこから出会えすらないのに、というひねくれた思いが湧き上がってくる。

（あの人の恋人は、こんなぼろぼろの格好とか絶対しないでしょ）

隣に住んでいれば、この先、明司の恋人とすれ違う可能性もあるかもしれない。ぼろぼろで疲れ果てて帰ったところに、恋人といちゃつく上司の姿を見せられるのはかなりのストレスだ。

紗絵は、職場にも家にも安らぐ場所がなくなってしまったかのような絶望感でいっぱいになりながら、一人焼き肉店の暖簾を潜った。

ランチセットと単品で肉を数種類注文し、それを待つ間、大学時代からの友人へ電話をかける。紗絵の仕事が忙しく、また友人の土日は彼氏のためにあるのでなかなか会えないが、電話だけは頻繁にしていた。

「あ、由美子？ 私」

周囲の迷惑にならないように声を潜めるが、学生やファミリー客が多くかなり騒がしいため、そこまで会話を気を遣わなくても良さそうだ。

『引っ越し終わったの？』

『終わった。片付けは終わってないけど』

『なんかざわざわしてない？ どこで電話してるのよ』

「焼き肉屋。朝からなにも食べてなくてさ。それより、ちよつと聞いてくれる!」
 紗絵はスマートフォンを右手から左手に持ち替えて、テーブルに置かれた皿を手前に引き寄せる。皿に焼き肉のタレを入れたところで、肉がテーブルに並べられた。

『またなにかあったの? 憧れの社長と』

茶化すような口調で言われるのもいつものことだ。紗絵がそれだけ明司の話題を出しているからである。ただ、由美子はなにか勘違いをしているようで、明司と自分が恋愛関係になるような言葉を頻繁に口にした。

(そんなわけないのにね)

紗絵は苦笑しつつ、つい先ほど明司に会ったという話をした。

『まさかの隣人!? え、もうそれ運命じゃない?』

「なに言ってるの。隣にいますとか、朝から晩まで見張られてるみたいじゃん……もう泣きそうだよ」

愚痴を言うために電話をしたのに、なぜか由美子のテンションは高い。

『えくだって、憧れの人なんでしょ? 昔、樋谷明司さんのそばで仕事ができるなんて幸せ〜とか言ってたかった?』

「言ったよ! 言っただし、今でもそう思ってるけど! 由美子だって社長の嫌味を聞いてたらわかるって。この間なんて『お前は学生時代にもう少し寸法感覚を学んでおくべき

だったな。ちゃんと卒業したのか?』とか言うんだよ!? 信じられない!」

『社長の言ったこと一字一句覚えてる辺り、突っ込みどころ満載なんだけど』

「覚えてるに決まってるよ! 私、社長のこと一日中がつっつき見てるからね」

『……性格悪いとか言いながらやっぱり好きなんじゃないの?』

「好きじゃないってば。本人に言えないんだから聞いてよ! 性格悪すぎてムカつくけど、あの才能の前では性格とかどうでも良くなっちゃうんだから仕方ないでしょ。まず外観デザインセンスが天才的でしょ。それに目立たないところもすごいっていうか。

ドS上司だけど、私、ほんと社長のそばで働けて良かった……」

『それで恋愛じゃないとか意味不明。いつも愚痴から始まって、最後は社長の賞賛で終わるよね』

「憧れと恋愛は違うの」

『へえ〜まあ頑張ってる。そのうちいい話を聞けることを期待してるんだから。ね、片付け落ち着いたらご飯行こうよ。連絡して。じゃあ彼が構えて言ってるから切るね』

「ちよ、待つ……切れた」

謎の言葉を残され、一方的に電話を切られてしまう。話し足りなかった紗絵は、友人の素っ気なさにあふてくされながらスマートフォンをテーブルに置いた。

金網の上に置いた肉はほどよく火が通り食べ頃だ。それを皿に取り、タレをつけて口

に運ぶ。

(んゝ美味^{おい}しい！)

紗絵は二人前以上の肉を平らげてお腹を満たすと、街の散策に出かけたのだった。

* * *

明司は遠ざかっていく小さな背中を見送りながら、行き場をなくした手をゆつくり下ろした。声に出そうなため息をなんとか呑み込み、エレベーターから降りる。

「一緒に暮らすって言ってたよな」

年下の部下に振り回されている自覚はあるが、声に出すとますます深く落ち込んでしまう。失恋程度でダメージを受ける自分の弱さに顔を顰^{しか}めた。

隣に住んでいたのは、自分と同世代の三十代の男だったはずだ。ただ、思い出そうとしても顔が出てこない。

明司がこの部屋を購入した時にはすでに入居していた。しかし引越しの挨拶^{あいさつ}に何度行っても隣人は留守で、東京では隣近所と接点がないのも珍しくないかと諦めた。

結局、男の姿を見たのは、転居してかなり経ってからだ。

一緒に住むと言っていたから、隣人の男が紗絵の恋人なのだろう。

結婚に向けてなのか、ただの同棲かはわからないが、隣の部屋で片思いの相手が恋人と暮らし始めるなんて冗談のような話だ。

(建築家として尊敬されてるのはわかるんだが、上司としては嫌われてるだろうし、脈なんてほなかったからな)

どうしてこれほど紗絵が好きなのか。自分でも疑問に思うことがしばしばある。

まったく明司の気持ちに気づかない紗絵にイライラし、意地で好きでい続けているような気がしないでもない。

迂闊^{うかつ}でミスは多いし、十を言っても五くらいしか頭に入っていない。感情が顔に出やすく、客との打ち合わせでは、はらはらすることばかり。

ただ、いつも一生懸命で、彼女の笑ったり怒ったり忙しい感情の変化を気に入っているのもたしかだった。

本人には、客の前でわかりやすく感情を見せるなと口うるさく言っているのに、変わってほしくもないと思う。

(今は無理でも、いずれはと思っていたんだが……どうするか)

彼女が目指す一級建築士になったら、自分と肩を並べて同じ仕事ができるようになってから——上司としてではなく一人の男として口説きたい、そう考えていた。

そこまで悠長に構えていられたのは、普段の彼女にまったく男っ気がなく、ほかの男

に取られる心配を微塵^{みじん}もしていなかったからだ。

（前に恋人ほしくとか言ってたよな？ でも、合コンなんてする暇もなかったはず。あれからできたのか？）

明司はマンション近くの喫茶店に向かって歩きながら、顎^{あご}に手を当てる。ぼんやりと考え事をしている、歩くスピードは速く迷いはない。

駅と隣接する商業施設にも多数の飲食店が入っているが、土日になると近隣から来る客でごった返すため、明司は足を延ばして顔馴染みとなった店主の店を利用していた。モーニングやランチで家庭料理を提供しており、価格も安く、それでいて美味^{おい}しく、一人暮らしの自分にはありがたい店だ。

古めかしい木のドアを開けて、厨房^{ちやうぼう}にいる店主に会釈^{えしやく}をする。若い女性店員がやって来て、すぐに席に案内された。

「いらっしやいませ。あの、こんにちは」

この店で数ヶ月ほど前から働く女性店員は、頬を染めながら伝票を手に明司のもとへ来る。

彼女のような反応は明司にとってなんら珍しくない。好意を持たれているとわかって迷惑^{めいわく}なだけである。

化粧^{けしょう}つ気がなく、美人^{めいじん}とは言いがたいが、優しそうな顔つきが厨房^{ちやうぼう}にいる女性と瓜二

つだ。おそらく店主とその妻の娘なのだろう。

二十代に見えるが、ほかの仕事には就いていないのだろうか。それとも平日の朝と土日だけ働いているのか。ふと疑問を持ったが、それを聞くほど彼女に興味があるわけはなかった。

「ランチプレートを」

淡々と返すと、彼女はがっかりしたように視線を落とし、伝票に注文を書き取った。

「かしこまりました。お飲み物はいかがなさいますか？」

「紅茶で」

「はい、ランチプレート、お飲み物は紅茶ですね」

仕事中に私語をするわけにもいかないのだろう。明司が話しかけてくれるのを待っているのはわかったが、それに応^{こた}えてやる義理もなかった。

すぐに膨^{ふくら}れっ面^{めん}をする紗絵^{さ絵}にも、これくらい可愛^{かわい}げがあればいいのとは思^{おも}うものの、こんな風に彼女から言い寄られるところなど想像もつかない。

ぱっちりとした大きな目で、睨^{にら}むように上目遣いで見てくる紗絵を思い出し、明司は口元を緩^{ゆる}ませた。紗絵は美人^{めいじん}とは言いがたいが、笑った顔が可愛らしい女性だ。パンツスーツ姿は仕事ができる女性といった雰囲気なのに、喋^{しゃべ}ると台無しなところもおもしろい。よく食べるわりには腰が細く、胸は意外とある。そんな目で見てしまっているこ

とは絶対に言えないが。

(あと、顔を真っ赤にして怒ってるところもおもしろいしな)

顔に出やすいため、明司を苦手としていることにはすぐ気づいた。だからよけいにか
らかいたくなってしまう、さらに嫌われるという悪循環。

好きな子からかうことでしか好意を向けられないなんて小学生か、と間拔けな自分
にうんざりするものの、紗絵の表情の変化を見ていることが楽しくてやめられない。

臆さずにぼんぼんと言いつ返し返してくるところが特におもしろかった。

「お待たせしました。カレーのランチプレートです。お飲み物は食事が終わった頃にお
持ちします」

「ありがとう」

紗絵のことを考えていたからか、そうと気づかず女性店員に向かって笑いかけていた
ようで、彼女が見る見るうちに顔を真っ赤に染めた。

「あ、あのっ、この近くにお住まいなんですか？」

しまったと目を逸らす、そんな明司の態度に気づかず、女性がチャンスとばかりに
話を続けた。明司は内心舌打ちをしたい気分、視線をテーブルに落とした。

「ええ、まあ。近くのマンションに」

会話のきっかけを作ってしまったことにうんざりした気持ちになったが、こういうこ

とは珍しくもない。明司がスプーンを手にすると、女性は空気を読んだのか一礼しその
場を離れていった。

明司は胸を撫で下ろしつつ、食事を進める。

(隣に住むってことは……あいつが恋人と一緒にいるのを見る可能性もあるのか)

自分には膨れっ面しか見せないが、恋人の前にいる時は甘えた顔を見せるのだろうか。
カレーの辛さの中に苦味が混じったような気がして、眉を寄せた。

(引越すか……いや、待てよ)

むしろ、隣にいるのだから、今までよりもずっと近づきやすくなるのではないか。

プライベートの誘いなどかけても断られるとわかりきっていたため、機が熟すのを
待っていたが、それが今なのでは。

(結婚してるわけじゃないんだから、セーフだろ)

これから同棲するという部下と恋人の仲を壊すのは忍びないが、ようやく来たチャン
スだとも考えられる。

もちろん彼女に無理強いをするつもりは毛頭ないし、振られたら諦めるくらいの分別
はある。だが、なにもせずに諦めるつもりもなかった。

(こんなにも好きだと思っただけなんだ)

明司は、紗絵と出会った時のことを思い出し、食事の手を止めた。

大学卒業後、父が社長を務める樋谷建設に入社したのは、前々から決まっていたことだった。

面接とも言わぬ面接を通り、おためごかしの親切をやり過^{なす}ごしながら、樋谷建設に依頼される大型案件に携^{なす}わる日々は、充実しているようでそうでもなかった。忙しくやりがいがあったが、いつもなにか違うと思っていた。

そんな時だった。父から、面接を担当する役員の一人が病欠だから人数合わせに來いと言われたのは。

面倒だったが、断る理由もなかったために従った。

新卒者の人事面接会場となる会議室では、自分を含め、横一列に並んだ役員たちの前で一人一人の面接が行われていた。

(全員同じに見える……)

ありきたりな自己アピールにうんざりしてきた頃、次の面接者の順番が来て、ひとときわ高い声が会議室に響き渡る。

「本田紗絵です！ 樋谷明司さんに憧れて、追いかけてここに來ました！ 樋谷建設以外で働きたくありません！」

まさか大学生の口から自分の名前が飛び出すとは思わず、明司は手に持ったペンを落

としそうになりながら彼女の顔を凝視する。

彼女は、緊張なのか興奮なのか頬を赤らめ、一生懸命自己アピールをしているものの、その内容のほとんどが建築家、樋谷明司の話で、担当する面接官も苦笑を漏らしていた。自分をアピールしないで、いかに明司が建築家として優れているかを語ってどうすると皆が思い始めた時。

「いつか……樋谷明司さんの設計する家を見たいんです。国際コンペで最優秀作品賞を取った『ずっと住み続けられる家』は、まるで本当にそこに人が住んでいるみたいでした。そこに住む誰かを想像して造ったってわかったんです。あんな風に誰かの心に触れる作品を手がけたいと思いました。樋谷さんの近くで働きたい。部下になりたいんです。御社が個人住宅の仕事を請け負っていないのは重々承知していますが、少しでも可能性があるなら、諦めたくないんです」

まさか、コンペに出した明司の作品を知っている学生がいるとは思わなかった。国際コンクールではあるものの、学生向けのコンペということもあり新聞に小さく載った程度なのに。

二十代で受賞した建築賞の話題は、関わる人の口に度々上^{のぼ}ったが、まさか学生時代に制作した『ずっと住み続けられる家』について熱く語られるなんて夢にも思わなかった。(あれについて褒められるのは……くすぐったいというか、恥ずかしいというか)

隣に座る父が、なにやらニヤニヤ笑いを浮かべて彼女を見て、明司に視線を向ける。明司は二人から目を逸らし、赤くなりそうな頬を手のひらで押さえた。

学生時代に制作した『ずっと住み続けられる家』は、自分が理想とする家族像を模型として形取ったものだ。

明司が物心ついた時には、両親の夫婦仲はすっかり冷え切っていた。

自分を育ててくれたのは住み込みの家政婦のチエだし、勉強を見てくれたのは家庭教師だ。父とはそれなりに話す機会があったが、母とは顔を合わせることも少ない。

大学に入った頃には、互いをいない人として扱う両親にうんざりして家を出たものの、心の根底にある家族への憧れは人一倍強かった。

幸せそうな家族に憧れと妬みはあっても、自分は世間一般から言えば非常に恵まれている。だから誰にも言えなかった。

あの作品は、そんなもやもやした気持ちを抱えていた自分が、もしなにか一つでも違っていたら、こんな未来もあつたのではないかと考えながら作ったものだった。

気持ち作品としたことで、自分自身が救われたような気がした。運良く最優秀作品賞という結果になり、気持ちに一区切りついた瞬間でもあつたのだ。

(あの時……家を造る楽しさを知ったんだよな。まあ模型なんだが)

樋谷家では叶えられなかったが、家族と自然に会話ができる家を造りたい。そこに住

む人に笑顔をもたらしたい。

そんな思いが、あの頃から自分の心の奥底にあつたのだと気づいた。

毎日の仕事に不満はないのに、どこか空虚な思いを抱えていた理由はこれだったのかと悟り、胸が熱くなった。

明司は噴きだしそうになる口元を押さえて、手元にあるメモ帳に「本田紗絵」と名前を書いた。

おそらく目の前の椅子に座る彼女は、自分が熱く語っている樋谷明司がこの場にいるなんて夢にも思っていないだろう。

インターネットで調べればいくらでも経歴は出てくるが、写真は無い。彼女が明司の顔を知らないであろうことは簡単に想像がついた。

(本田紗絵か。望み通り俺の部下にしてやるってこの場で言ったら、どんな顔をするかね)

その後、父に頼み、樋谷建設の子会社として樋谷住宅を発足した。父が決めたメンバーの中に、入社したばかりの本田紗絵の名前を見つけた。なんだか父の手のひらの上で転がされている気がしないでもないが、断る理由はない。

上司として手取り足取り仕事を教えてきたのは、自分に道を示してくれたことへの感謝と、個人的に紗絵を気に入ったからだ。

最初こそ明司の顔に騙されかけてくれたのに、人間性を知っていくうちに彼女の目に落胆が見えて、それが非常におもしろかった。

槌谷明司という男をどこか神聖視しているようだったから、理想の像が崩れたのだろう。それでいいと思った。

その頃には、偶像ではなく一人の男として彼女に自分を見てもらいたいと望んでいたから。

（性格の悪い上司と思われるのを知っていて、何年好きでいると思ってるんだ。簡単に手放せる程度の気持ちなら、こんなに焦がれてはいないだろう？）

自分自身にそう言い聞かせる。

略奪など自分の趣味ではない。

紗絵の幸せを壊したいとは思わないが、なにもしなければ始まりさえしない。黙って見守っているだけの時間はもう終わりだ。

（楽しみだな）

彼女をどうやって捕らえるか、考えるだけで気持ちが悪くなる。もし紗絵がこの場にいたならば、自分の顔を見て一目散に逃げだしたことだろう。

明司は食事を終えると、会計のために席を立った。視線でアプローチしてくる女性店員には目もくれず、愛しい部下に思いを馳せるのだった。

第三章

一日片付けに追われた日曜日が過ぎ、翌月曜日。

紗絵はいつもよりも三十分早く起き、身支度を調えた。

（ドアを開けた瞬間に社長の顔は見たくないし、うん、早く行こう）

明司がいつも会社に着く時間は、八時四十五分。始業十五分前だ。

このマンションから会社までは徒歩と電車を合わせて約四十五分。

本来は八時前に家を出れば十分に間に合うのだが、そうするとはったり明司と会ってしまふ可能性が高い。少し早過ぎる気がするが、七時半に家を出た。

（気づかれませんが！）

紗絵は、ゴミ袋を持ちながら足音を立てないように廊下を歩いた。

エレベーターホールを見回し、明司の姿がないことを確認する。エレベーターに飛び乗り、閉まるボタンを連打してほっと息を吐いた。

（混雑してる電車内で会うことはないだろうし、まだ時間もあるから、どこかでモーニングでも食べていこうっと）

駅に隣接する商業施設内には、フードコートやレストランが多数入っているものの、土日は混雑していて一人でまったりと過ごせるような場所はなさそうだった。

土曜日に駅までの道を探索し、朝から開いている喫茶店や、ランチに使えるようなレストランをいくつか見つけた。紗絵は手に持ったゴミを捨てて、その中の一つに向かって歩きます。

（ここ、通りかかって気になってたんだよね）

駅に向かう途中にある五階建てビルの一階に、こぢんまりとした喫茶店が入っている。ビルの外階段の踊り場に設置されたポストは二つで、一つは喫茶店の名前、もう一つには名前が入っているため、二階より上を倉庫や住居として使用しているのかもしれない。ビルも喫茶店も、商業施設に比べると古めかしさが拭えない。木の枠のはめ込みガラスで造られたドアを押すと、カランとベルが鳴り響く。

（昔からある店は、絶対に美味しいって相場が決まってるんだから）

温かみのある木目調のタイル床や、同じ色合いのテーブルや椅子が目に入った。白い壁は経年劣化により多少薄汚れているが、掃除は行き届いているようだ。店内はそう広くなく、カウンターの奥には厨房があった。お腹が空くようないい匂いが漂ってくる。

「いらつしやいませ。お一人様ですか？」

「はい」

二十代くらいの女性店員に声をかけられて席に案内された。

二人席が二つと、四人席が四つ。あとはカウンターの奥にある店内の席は、まばらに埋まっていた。

カウンターの奥にいるのは四、五十代の男女だ。夫婦と娘で店を切り盛りしているのかもしれない。

紗絵はメニューを見て、ワンコインで食べられるモーニングを注文した。するとドアベルが鳴り響き、店内に客が入ってくる。なんともなしにそちらに目をやると、入ってきたばかりの男性客と目が合った。

（うそでしょ！）

一瞬、彼がにやりと笑ったような気がする。店員の案内を断り、こちらに向かってくるのはなぜか、目の前の椅子を引き堂々と座るのはなぜなのか。

「おはようございます」

「朝から鬱々としたため息だな。飯がますますさうだ」

誰のせいだと——その言葉をなんとか呑み込んで、紗絵は笑みを浮かべた。

（飯がますますさうなら、ここに座らなければいいのでは……っ？）

額に青筋が浮かぶが、口には出さない。

朝から明司に会わないように早く家を出てきたというのに、まさかそれが裏目に出る

とは思わなかった。雰囲気の良い店で気に入ったが、もうここには来ない。明日からは家で朝食をとろうと決める。

「モーニングを。飲み物はホットコーヒー」

「かしこまりました。あの……今日は、お一人じゃないんですね」

女性店員が明司に声をかけた。どうやら明司はこの店の常連らしい。ますます店選びを間違ったとしか言いようがない。

「ええ、まあ」

明司は紗絵との関係を濁し、そう答える。女性は気になってたまらないのか、明司と紗絵を交互に見ては、なにかを言いかけて口を閉じた。

「社長は、こちらによくいらつしやるんですか？」

彼女の気持ちを察した紗絵は、問題にならない程度に助け船を出す。

女性店員は紗絵が部下だと知って安心したのか、口元を緩めて伝票を手に厨房へ声をかけた。

「たまにな」

「へえ、そうですか。相変わらずモテますね」

このようなことは珍しくない。

今までも仕事中、明司に同じような視線を向ける女性は数多くいた。当然、紗絵を相

手にした時のような嫌味なんて言うはずもないから、実地調査に赴くだけで近隣の奥様がわざわざと寄ってくるくらいだ。紗絵はそのたびに明司の本性を暴露したくなる。

「そうか？」

明司は飄々と答える。気づいているくせにと睨んでも、軽く受け流された。

「別に、いいんですけど」

「へえ、嫉妬でもしてるのかと思った」

「し、してるわけじゃないですよ！ 変なこと言わないでくださいよ」

凶星を突かれたわけでもないのに、頬が熱くなってくる。百戦錬磨の男にかかれば、ここ最近恋人のいない紗絵など赤子の手を捻るより簡単に弄ばれてしまいそうだ。

「お前になら、嫉妬されるのも悪くないと思ったのになあ、残念」

真っ直ぐに見つめられ、人が違ったように微笑まれる。

怒られてばかりだからか、あまり明司の笑った顔を見た記憶がない。だが、こんな顔で見つめられたら、D S で性格が最悪な上司であっても見蕩れてしまう。

明司の目を見ていられず、いつものように膨れっ面で目を逸らした。

「社長？ 疲れます？ なんか変ですよ」

「お前よりは元気だよ」

最近仕事が忙し過ぎるせいで、紗絵が別の女にでも見えているのだろうか。